

注

- (1) 「漢字を構成する各線で、一筆で書かれるもの」(藤原宏氏ほか編『書写書道用語辞典』[平成2年 第一法規] P 34)。
 (2) 書の線のもつ性質で、書線の様相とその内容をいう(前掲〔注1〕に同。P 189)。
 (3) 古谷稔氏解説『日本名筆選』8 [平成23年 二玄社]・小松茂美氏監修・名児耶明氏解説『日本名跡叢刊』55・56 [昭和56年 二玄社]
 (4) 尾上柴舟・大石隆子氏解説『伝藤原行成筆御物倭漢朗詠集一』[昭和43年 雄山閣] P 2
 (5) 『日本名筆選』8 (前掲〔注3〕)に掲載の図版を目視により確認した結果、本項の基準を「0.3」・「0.4」とすることが適切であると判断した。
 (6) そこに該当しないのは伊予切では漢詩二か所・和歌六か所、粘葉本では漢詩四か所・和歌一〇か所。
 (7) 画は漢字にのみ用いられる用語であるため、仮名のことを指す場合は「部分」と称した。
 (8) 飯島春敬氏解説・釈文『平安朝かな名蹟選集』第55巻 [平成2年 書藝文化新社] P 64
 (9) 小松茂美氏監修・名児耶明氏解説『日本名跡叢刊』55 [昭和56年 二玄社]の解説(P 124)等。

【追記】

本稿中、使用した「文字位置計測ソフト^{ver.1.1}」は根本訓史氏(茨城県警察本部刑事部科学捜査研究所)によって制作された。著者の発案をもとに同氏に開発して頂いた。同氏、並びに同研究所には謹んで感謝申し上げます。

第四節 近衛本の性格 — 粘葉本・伊予切との関係を中心に —

一

近衛本は巻下の零本二卷（現在、陽明文庫所蔵）が近衛家（五撰家の筆頭）に伝来したことからその名がある。巻上については藤田美術館所蔵の断簡一葉のみ（春部「霞」の六行分）が現存している。それにより「もとは上・下卷完存の調度手本として書写されたもの」と考えられている⁽¹⁾。

近衛本の本文に関する先行研究には、堀部正二氏による論が挙げられる。同氏は、平安時代書写とされる諸伝本を、主に、本文の近似関係より三大別され、近衛本を、粘葉本・伊予切・法輪寺切と「同一人の筆と考へられるものであって」、「本文に於いても全く同一系統」であると説かれた⁽²⁾。

また、片桐洋一氏も、「粘葉本と近衛本の本文は微細な点まで一致」、「全く相似」しており、「同筆と断定するにはばかられるものは全くないと思ふのである」と述べられた⁽³⁾。

如上のご論に扱われなかつた若干の資料を調査し得たことから、改めて平安時代書写諸伝本における近衛本の位置付けを試みた。その結果、近衛本は粘葉本・伊予切・法輪寺切と同類ではあるものの、その中においてはやや異なる様相を呈しているという結論に達した。それらの伝本との関係を中心に近衛本の性格について述べる。

二

近衛本の現存状況について述べる。『古筆学大成』第一三巻には零本二卷・断簡三葉が収められている。それらに巻上の断簡一葉も合わせ、調査し得た詩歌句を番号で示す。

以下、零本（二卷）をそれぞれA・Bとし、断簡（四葉）をC・D・E・Fと仮称する。なお、左掲A・B・Eには紙継ぎ

の跡が認められる。その位置を「」で示す。

近衛本の現存状況について述べる。『古筆学大成』第一三巻には零本二巻・断簡三葉が収められている。それらに巻上の断簡一葉も合わせ、調査し得た詩歌句を番号で示すと次の通りとなる。以下、零本二巻をそれぞれA・Bとし、断簡四葉をC・D・E・Fと仮称する。なお、左掲A・B・Eには紙継ぎの跡が認められる。その位置を「」で示す。

◆零本二巻〔陽明文庫蔵〕

A 「鶴」(題)・443〜527・「古京」(題)／532〜612

B 「眺望」(題)・624〜648／「庚申」(題)・650〜660の前部／「親王」(題)・666〜677⁷⁾・679〜698・700〜720／「老人」(題)・723〜749
 ／「述懐」(題)・751〜784・786〜796の次⁸⁾・803

◆断簡(四葉)

C 76〜78 「藤田美術館蔵」

D 「閑居」(題)・613 「個人蔵」

E 750／649 「春敬記念書道文庫蔵」

F 660の後部〜664 「昭和古筆名鑑」所載」

右掲A〜Fと、諸伝本の詩歌句とを照合すると、「断簡D・E・F」の原姿(切り出される前の位置)は次のようであった可能性が考えられる。

①「断簡D」は「零本A」の末尾(612の次)に位置していた。

②「断簡E」中の750・649⁹⁾はそれぞれ「零本B」中の749・648の次に位置していた。

③「断簡F」中の「660の後部」は「零本B」中の「660の前部」の直後の部分にあたる¹⁰⁾。従って、「断簡F」は「零本B」の当該箇所から切り出されたことが推測される。

以上、近衛本の詩歌句を集成し、詩歌番号順に排列し直すと総計三四一首となる（76〜78・443〜527・532〜613・624〜664・666
 ↓ 677・679〜698・700〜720・723〜784・786〜796の次↓803）。

以下、76〜78・443〜804の範囲内に限定し、考察を行う。そのうち、528〜531・614〜623・665・721・722については（近衛本の散逸箇所である可能性が考えられるため）対象外とする。

三

まず、形態的な面から近衛本と諸伝本との関係について考察を行う。

本稿の考察範囲内において平安時代の書写とされる諸伝本の詩歌句を集成すると三四八首となる。そのうち、いずれかの伝本に無い詩歌句は次の五六首である。

449・459・468・472・476・482・489・507・518・534・535・542・547・549・551・556・561・564・584・596・598・601・603・629・636・652の次・
 657・663・677・678・684・699・701・703・712・714・729・735の次・736の次・738・739・740・741・742・743・744・745・756・757・760・784・
 785・796の次・797・803の次・804

近衛本と諸伝本との関係をみるため、このうち、脱落または追補である可能性が考えられる、独自事象（いずれか一本のみが他本と異なる場合）を除く（有る場合も無い場合も独自事象は除く）と次のごとく一一首となる。

詩歌番号を挙げ、詩歌句の有無を「有」「無」とし、諸伝本の略号を括弧内に記す。

① 449 有（近・粘・伊・久・卷・太・山・多・戊・葦）

無（雲・関）

② 534 有（近・粘・伊・久・卷・太・下・山）

無（雲・関・戊・葦）

③ 535 有 〔近・粘・法・伊・関・久・太・下・山・戊・葦〕

無 〔雲・卷〕

④ 564 有 〔近・粘・伊・久・卷・山・多・戊・葦〕

無 〔雲・関〕

⑤ 603 有 〔近・粘・伊・久・大内・山〕

無 〔雲・関・卷・戊・葦〕

⑥ 652 の次有 〔安・卷・定大〕

無 〔近・粘・伊・雲・関・久・益・山・戊・葦〕

⑦ 712 有 〔近・粘・伊・久・安・卷・山・戊・葦〕

無 〔雲・関〕

⑧ 714 有 〔近・粘・伊・久・安・卷・山・戊・葦〕

無 〔雲・関〕

⑨ 729 有 〔近・粘・伊・久・安・卷・太・山・戊・葦〕

無 〔雲・関〕

⑩ 784 有 〔近・粘・伊・久・安・卷・太・益・山・戊・葦〕

無 〔雲・関〕

⑪ 797 有 〔近・粘・伊・久・益・山〕

無 〔雲・関・安・卷・太・戊・葦〕

右掲（二一首）において近衛本は粘葉本類と全て一致していた。一方、⑥¹²を除く一〇首については、近衛本・粘葉本類と雲

紙本類との一致は見られず、また、いずれも近衛本・粘葉本類の有するところであった。

次に、近衛本・粘葉本・伊予切のそれぞれに独自性が見られる事例を挙げる。⁽¹³⁾

◆近衛本の独自性

(1) 699 無 (近)

有 (粘・伊・雲・関・久・安・卷・太・山・戊・葦)

(2) 785 無 (近)

有 (粘・伊・雲・関・久・安・卷・太・益・山・戊・葦)

(3) 804 無 (近)

有 (粘・法・伊・雲・関・久・安・卷・太・益・山・多・戊・葦)

◆粘葉本の独自性

(4) 796の次無 (粘)

有 (近・伊・法・雲・関・久・安・卷・太・益・山・戊・葦)

◆伊予切の独自性

(5) 601 無 (伊)

有 (近・粘・雲・関・久・卷・山・戊・葦)

右掲(1)699・(2)785については、いずれも料紙の継ぎ目ではなく、一紙の中間なので、後世、さかしらに切断したものでなく、⁽¹⁵⁾「単なる誤脱⁽¹⁶⁾」かと思われる。また、(3)804・(4)「796の次」・(5)601についても同様に考えられる。

次に、排列について述べる。平安時代の書写とされる諸伝本間において、排列に異同がある場合は一八か所であった。詩歌番号を挙げ、諸伝本の略号を括弧内に示すと次の通りである。

- (15) 729 · 730 (近·粘·伊·久·安·卷·太·戊·葦)
- (14) 726 · 727 · 728 (近·粘·伊·雲·関·安·卷·山·戊·葦)
 701 無 | 702 (関)
- (13) 701 · 702 (近·粘·伊·久·安·卷·太·山·戊·葦)
- (12) 687 · 686 (久)
 686 · 687 (近·粘·伊·雲·関·安·卷·太·多·戊·葦)
- (11) 672 · 671 (久)
 671 · 672 (近·粘·伊·雲·関·卷·山·多·戊·葦)
- (10) 656 · 655 (久)
 655 · 656 (近·粘·伊·雲·関·安·卷·山·多·戊·葦)
- 625 · 626 (安)
- (9) 625 · 626 · 627 · 628 · 629 (近·粘·伊·関·卷·山·戊·葦)
 625 · 626 · 627 · 628 · 629 無 | (雲)
- (8) 602 · 603 (大内)
 602 · 603 (近·粘·伊·久·山)

729 無 | 730 (雲・関)

730 · 729 (山)

(16) 741 · 742 · 743 · 744 (近・粘・伊・雲・関・久・安・卷・太・戊)

741 · 742 · 744 · 743 (山)

741 · 743 · 742 · 744 (多)

741 無 · 742 無 · 743 無 · 744 無 (葦)

(17) 746 · 747 (近・粘・伊・雲・関・安・卷・太・山・俊和・戊・葦)

747 · 746 (久)

(18) 754 · 755 · 756 · 757 (近・粘・伊・関・安・太・山・戊・葦)

755 · 756 · 754 · 757 (久)

754 · 755 · 756 無 | 757 (雲)

754 · 755 · 756 · 757 無 (卷)

右掲の一八項目において、多数派に対して一本のみが相違する伝本には、久松切九か所(6)(7)(9)(10)(11)(12)(14)(17)(18)、山城切四か所(1)(2)(15)(16)、卷子本三か所(3)(4)(5)等が挙げられる。また、雲紙本には六か所(2)(5)(8)(9)(15)(18)、関戸本には四か所(5)(8)(13)(15)に無いということが確認された。

既に、拙稿¹⁴⁾において、『和漢朗詠集』全体を通して、排列の揺れと詩歌句の有無には相関性があり、「久松切・山城切・卷子本等の排列の揺れは雲紙本類の影響下に因る」という可能性を指摘した。近衛本では如上の性質は認められず、全てが粘葉本類と一致していた。

以上、形態的な面について考察した結果、確かに近衛本は粘葉本類に属するが、詩歌句の有無という点においては、独自

事象が、近衛本では三首(699・785・804〔近衛本、無〕)、粘葉本・伊予切ではそれぞれ一首(796の次〔粘葉本、無〕・601〔伊予切、無〕)が確認され、近衛本と粘葉本類との間には若干の異同が認められた。従つて、詩歌句数に限つていえば、本考察の範圍内では近衛本の方が粘葉本類より僅か乍ら少ないといえる。

四

個々の本文を考察した結果について述べる。

和歌は一句、漢詩は一文字を単位として異同調査を全本文に亘つて行つた。その際、異体字・略字等について、また、和歌では漢字と仮名との違い、仮名遣いの違い等について異同とは見做さないこととした。また、後人による改竄かと思しき文字、剥落等のため判読不可能な文字、同筆と認められない文字等については原則、対象外とした。

その結果が次の【諸伝本間の本文異同調査表】であり、斜線の左は和歌、右は漢詩を示し、上と右に記した略号の結ばれた欄をそれぞれ三段に分け、上段にはその二本間における対照箇所数を、中段には同文箇所数を、下段にはその対照箇所数に対する同文箇所数の割合を%で表した。

同表に拠ると、近衛本と諸伝本との本文関係の概略については、近い順に、和歌は法輪寺切(九六・九%)、粘葉本(九一・三%)、伊予切(八九・五%)、漢詩は粘葉本(九四・一%)、伊予切(九三・二%)、法輪寺切(九二・四%)が挙げられ、和歌・漢詩ともに粘葉本・伊予切・法輪寺切に近いということが確認される。以下、それらが同文であつて、かつ、その本文が他本との間に異なるケースを全て挙げる。

まず、近衛本の本文を載せ、当該箇所傍線を付し、次に異同を載せ、諸伝本の略号を括弧内に示す。

① 479 新豊酒色清冷於鸚鵡之盃中長衆歌聲幽咽於鳳皇之管裏〔近〕

〔同〕之盃〔粘・伊・法〕

【諸伝本間の本文異同調査表】

葦手本	戊辰切	山城切	卷子本	久松切	伊予切	法輪寺切	近衛本	粘葉本	関戸本	雲紙本	歌 詩
283	279	278	282	277	283	36	103	281	284		雲紙本
201	184	192	212	208	191	26	67	184	265		
71.0	65.9	69.1	75.2	75.1	67.5	72.2	65.0	65.5	93.3		%
283	279	278	282	277	283	36	103	281		759	関戸本
202	182	197	211	205	189	28	65	182		705	
71.4	65.2	71.0	74.8	74.0	66.8	77.8	63.1	64.8		92.9	%
280	276	277	279	276	283	34	103		827	763	粘葉本
184	179	148	183	220	266	33	94		585	559	
65.7	64.9	53.4	65.6	79.7	94.0	97.1	91.3		70.7	73.3	%
102	103	101	103	105	105	32		459	450	414	近衛本
69	72	60	60	86	94	31		432	315	313	
67.6	69.9	59.4	58.3	81.9	89.5	96.9		94.1	70.0	75.6	%
36	36	35	36	36	36		131	152	149	146	法輪寺切
27	24	21	24	29	33		121	146	109	112	
75.0	66.7	60.0	66.7	80.6	91.7		92.4	96.1	73.2	76.7	%
282	278	279	281	278		152	459	842	827	763	伊予切
192	183	155	194	227		149	428	809	583	559	
68.1	65.8	55.6	69.0	81.7		98.0	93.2	96.1	70.5	73.3	%
276	272	273	275		835	151	459	835	822	754	久松切
208	193	175	201		686	125	379	699	585	556	
75.4	71.0	64.1	73.1		82.2	82.8	82.6	83.7	71.2	73.7	%
281	277	276		825	830	147	452	830	817	751	卷子本
200	187	170		526	530	86	285	532	455	430	
71.2	67.5	61.6		63.8	63.9	58.5	63.1	64.1	55.7	57.3	%
277	273		809	814	819	151	444	819	806	738	山城切
168	156		508	657	653	121	344	656	603	565	
60.6	57.1		62.8	80.7	79.7	80.1	77.5	80.1	74.8	76.6	%
278		813	824	829	834	149	458	834	823	755	戊辰切
205		669	561	696	714	122	388	716	609	583	
73.7		82.3	68.1	84.0	85.6	81.9	84.7	85.9	74.0	77.2	%
	813	796	807	812	817	145	439	817	807	740	葦手本
	682	598	515	625	631	121	350	633	561	534	
	83.9	75.1	63.8	77.0	77.2	83.4	79.7	77.5	69.5	72.2	%

〔異〕盃之(雲・葦)

盃(関・久・山)

怀之(卷)

坏之(戊)

② 498 みわたせはまつのはしろきよしの山いくよをつめるゆきに□あるらむ〔近〕²⁰

〔同〕いくよをつめる〔粘・伊〕

〔異〕いくよつもれる(雲・関・久・卷・山・益・多・戊・葦)

③ 526 みかみもるゑしのたくひにあらねともわれもこゝろのうちこそおもへ〔近〕

〔同〕うちにこそおもへ〔粘・伊〕

〔異〕なかにこそたけ(雲・関・卷・戊・葦)

うちはもえつゝ(久)

うちにこそたけ(太・散・山・多)

④ 554 遺愛寺鐘鼓枕聴香鑪峯雪卷| 簾看〔近〕

〔同〕卷〔粘・伊〕

〔異〕撥(雲・関・久・卷・下・山・戊・葦)²¹

⑤ 572 明月好當| 三径夜緑楊| 宜作兩家春〔近〕

〔同〕當〔粘・伊〕

〔異〕同(雲・関・久・卷・山・戊・葦)

⑥ 634 楊岐路滑吾| 之送人多年李門波| 高人之送我何日〔近〕

〔同〕吾〔粘・伊・法〕

〔異〕我（雲・関・久・安・卷・益・山・戊・葦）

⑦ 639 としことにはるのわかれをあはれとも人におくるゝひとそしりける〔近〕

〔同〕としことに〔粘・伊〕

〔異〕としことの（雲・関・久・安・卷・益・山・戊・葦）

⑧ 657 聖皇自在長生殿不向蓬萊王母家〔近〕

〔同〕在〔粘・伊〕

〔異〕有（関・久・安・卷・下・山・定大・戊・葦）

⑨ 680 春過夏闌袁司徒之家雪應路達朝南暮北鄭大尉之溪風被人知〔近〕

〔同〕朝〔粘・伊〕

〔異〕旦（雲・関・久・安・卷・戊・葦）

⑩ 696 少日遂逃秦虎口暮年初謁漢龍顏〔近〕

〔同〕少〔粘・伊〕

〔異〕他（雲・関・久・安・卷・太・山・戊・葦）

⑪ 710 李延年之飭族託一妍以始飛衛子夫之待時在衆醜而永異〔近〕

〔同〕永〔粘・伊・法〕

〔異〕未（雲・関・久・安・卷・太・山・戊・葦）

⑫ 741 黄壤誰知我白頭猶憶君唯將老年淚一灑故人文〔近〕

〔同〕猶〔粘・伊〕

〔異〕徒（雲・閑・戊）

獨（久・安・卷・太）

獨徒（山・多）

⑬742 長夜君先去殘年我幾何秋風襟滿淚泉下故人多〔近〕

〔同〕襟滿（粘・伊）

〔異〕滿衫（雲・閑・久・安・卷・太・戊）

滿襟 衫（山）

滿襟衫（多）

⑭755 車前驥病驚駘逸架上鷹閑鳥雀飛〔近〕

〔同〕飛（粘・伊）

〔異〕高（雲・閑・久・安・卷・太・山・戊・葦）

⑮757 笮蠡収責棹扁舟而逃名謝安辭功伏孤雲而養志〔近〕

〔同〕伏（粘・法・伊）

〔異〕臥（雲・閑）

鞭（久・安・太・山・戊・葦）

出典未詳の、右掲①・③・⑧・⑪の近衛本・粘葉本類の本文について述べる。⑪の当該箇所は文意から「永」であると解されるが、①の当該箇所「之益」は誤写かと思われ、③の当該箇所「うちこそ」おもへも「誤り」とされている。また、⑧の当該箇所「在」について、三木雅博氏は、出典の本文とは異なり、閑戸本等の本文「有」の方が「本来の形であったと考えられる」と述べられた。それ以外の事例（右掲②・④・⑤・⑥・⑦・⑨・⑩・⑫・⑬・⑭・⑮）においては、近衛本・粘葉

本類の当該箇所と、他文献の本文との一致が認められるのは、著者の知る限りでは②・⑥・⑦の三首である。⁽²⁷⁾また、『和漢朗詠集考證』・『新潮日本古典集成』では、⑤・⑨・⑩・⑬・⑭・⑮の近衛本・粘葉本類における当該箇所が他文献の本文に改められるべき等と指摘されており、その点も注目される。⁽²⁸⁾

次に、近衛本・粘葉本・伊予切・法輪寺切の四本間において異同があるケースについて考察を行う。五五か所が確認されたが、それらは、

A 四本中、もしくは三本中、近衛本のみが異文であるケース…二六か所(うち、近衛本の独自本文⁽²⁹⁾一六か所)

B 四本中、もしくは三本中、粘葉本のみが異文であるケース…一か所(うち、粘葉本の独自本文⁽³⁰⁾九か所)

C 四本中、もしくは三本中、伊予切のみが異文であるケース…一六か所(うち、伊予切の独自本文⁽³¹⁾一か所)

D 四本中、近衛本・粘葉本と、伊予切・法輪寺切との間に異同があるケース…一か所

E 四本中、法輪寺切のみが異文であるケース…一か所(↓法輪寺切の独自本文)

の五つに分類される。この五五か所のうち、右掲「A」の、「近衛本のみが異文であるケース」(二六か所)が半数弱を占め、右掲A～Eのうち、最も多いということが知られた(独自本文も四本中、近衛本が最多)。

右掲「A」の「近衛本の独自本文」(二六か所)のうち、一五か所は近衛本の誤写によると思われる。⁽³¹⁾その他の三本(B「C」[E])に見られる「独自本文」も殆どのケースが誤写に因ると考えられる。以下、実質的事例を検討すべく、右掲から近衛本・粘葉本・伊予切・法輪寺切が「独自本文」を有するケースを除外した上で全ての事例を挙げる。前項同様、近衛本の本文を載せ、当該箇所傍線を付し、次の行には当該箇所が近衛本と同文である諸伝本の略号を括弧内に示し、以下、異同を載せる。

A 四本中、近衛本のみが異文であるケース(近衛本が独自本文であるケース、除外)

① 461 わひしらにましらなゝきそあしひきのやまのかひあるけふにやはあらぬ(近)

〔同〕ましらなゝきそ〔太〕³²

〔異〕ましこななきそ〔粘・伊・久〕³³

ましはなゝきそ(雲・関・卷・多・戊・葦)

ましこはなゝきそ(山)

② 虚洞有聲寒溜咽故山無主晚雲孤〔近〕³⁴

〔同〕洞〔関・雲切・久〕³⁵

〔異〕澗〔粘・伊・卷・山・戊・葦〕

③ 586 このもとをすみかとするはおのつからはなみるひとなりぬへきかな〔近〕

〔同〕なりぬへきかな〔久・葦〕

〔異〕なりにけるかな〔粘・伊・雲・関・卷・山・戊〕

④ 591 雖十惡兮猶引撰甚於疾風披霧雲雖一念兮必感應喻之巨海納涓露〔近〕

〔同〕必〔雲・関・久・山・戊・葦〕

〔異〕ナシ〔粘・伊・法・卷〕

⑤ 624 風翻白浪花千片鴈點青天字一行〔近〕

〔同〕青〔雲・関・久・安・卷・山・多・戊・葦〕

〔異〕清〔粘・伊〕

⑥ 630 みわたせはやなきさくらをこきませてみやこそはるのにしきなりけれ〔近〕

〔同〕にしきなりけれ〔葦〕

〔異〕にしきなりける〔粘・伊・雲・関・久・卷・山・多・戊〕

⑦ 634 楊岐路滑吾之送人多年李門波高人之送我何日 (近)

〈同〉波 (雲・関・仄・安・卷・益・山・戊・葦)

〈異〉浪 (粘・法・伊)

⑧ 646 蒼波路遠雲千里薄霧山深鳥一聲 (近)

〈同〉薄 (雲・関・卷・益・多・戊・葦)

〈異〉白 (粘・伊・久・山)

⑨ 668 江都之好勁捷也七尺屏風其徒高淮南之求神仙 一旦乘雲而何益 (近)³⁶

〈同〉ナシ (雲・仄)

〈異〉也 (粘・伊・関・卷・太・山・多・戊・葦)

⑩ 720 翠帳紅闌万事之礼法雖異舟中浪上一生之歡會是同 (近)

〈同〉帳 (雲・関・雲切・仄・安・卷・太・山・多・戊・葦)

〈異〉黛 (粘・伊)

[B 四本中、粘葉本のみが異文であるケース (粘葉本が独自本文であるケース、除外)]

(1) 515 関居屬於誰人紫宸殿之本主也秋水見於何処朱雀院之新家 (近)

〈同〉ナシ (伊)

〈異〉也 (粘・雲・関・久・卷・和3・山・戊・葦)

(2) 544 奇犬吠花聲流於紅桃之浦驚風振葉香分於紫桂之林 (近)

〈同〉於 (伊・雲・関・雲切・卷・太・山・戊・葦)

〈異〉ナシ (粘・久・多)

〔C 四本中、伊予切のみが異文であるケース（伊予切が独自本文であるケース、除外）〕

(1) 586 このもとをすみかとするはおのつからはなみるひとになりぬへきかな〔近〕

〔同〕はなみるひとに〔粘・戊・葦〕

〔異〕はなみるひと、〔伊・雲・関・久・卷・山〕

(2) 571 きのふこそさなへとりしかいつのまにいなはもそよにあきかせのふく〔近〕

〔同〕あきかせのふく〔粘・法・雲・関・久・山・戊・葦〕

〔異〕あきかせそふく〔伊・卷〕

(3) 660 布政治之庭風流未必敵於崐閩兼之者此地也好文之世徳化未必光干黄炎兼之者我君也〔近〕

〔同〕者〔粘・法・雲・関・久・山・多・戊・葦〕

〔異〕ナシ〔伊・安・卷〕

(4) 675 百里奚乞食於道路穆公委以政甯戚飼牛於車下恒公任以国〔近〕

〔同〕恒〔粘〕

〔異〕恒〔伊・雲・関・久・安・卷・山・戊・葦〕

(5) 789 いまこむといひしはかりになかつきのありあけのつきをまちいてつるかな〔近〕

〔同〕まちいてつるかな〔粘・法・山・戊〕

〔異〕まちいてつるかな〔伊・久・安・太・葦〕

〔D 四本中、近衛本・粘葉本と、伊予切・法輪寺切との間に異同があるケース〕

○ 778 為君薰衣裳君聞蘭麝馨香為君事容飾君見金翠無顔色〔近〕

〔同〕香〔粘・雲・関・久・卷・太・益・山・戊・葦〕

〔異〕ナシ〔伊・法〕

右掲「A」の当該本文のうち、②・⑥・⑨は近衛本の誤脱とみられる。さらに、③・④・⑤・⑧・⑩の、近衛本と粘葉本類との間に見られる異同箇所からもその中における近衛本の異質性が窺われた。³⁸⁾

また、右掲「A」において、近衛本との同文箇所が多い伝本には、久松切・雲紙本類・葦手本が挙げられる（久松切・葦手本〔七か所〕、雲紙本・関戸本〔六か所〕。本書〔第三章第七節〕中、述べる通り、久松切は、粘葉本・雲紙本兩類の要素を有しており、また、葦手本は雲紙本類の系譜上に位置している。

以上、近衛本と粘葉本・伊予切・法輪寺切とは特異な本文を共有していた。しかし、この四本間において異同がある際、近衛本のみが異文であるケースが最も多く、そこには一部、実質的な内容を伴うものも存し、また、僅か乍ら雲紙本類の本文の混在も認められた。³⁹⁾

五

考察範囲を限定し、近衛本の位置付けをめぐって、主に粘葉本・伊予切・法輪寺切との関係を中心に形態・本文の両面から再検討を行った。その結果を纏めるならば次の三点となる。

(1) 詩歌句の有無について、独自事象を除外すると近衛本は粘葉本・伊予切・法輪寺切と一致している。しかしながら、独自事象は近衛本では三首、粘葉本・伊予切ではそれぞれ一首が確認され、近衛本と粘葉本・伊予切との間には若干の異同が認められた。

(2) 排列においては、近衛本は粘葉本・伊予切・法輪寺切と全て一致している。

(3) 個々の本文の異同箇所において、近衛本は粘葉本・伊予切・法輪寺切と多くの同文箇所を有し、かつ、特異な本文を共有しているが、近衛本と、粘葉本・伊予切・法輪寺切との間には異同も見られ、内容的にも近衛本は異質性を帯びて

いることが窺われた。

ここから、近衛本は粘葉本・伊予切・法輪寺切と同系を成すものの、その中ではやや性格を異にするということが明らかとなった。

なお、近衛本・粘葉本・伊予切⁽⁴⁰⁾・法輪寺切の四本を「同筆」とする説もある。多用される字体・字形・字母等に共通性が認められ、また、四本の書が密接な関係にあるということは事実である。しかしながら、「同筆」であるのか否かという点については、未だ定説はなく、むしろ謎に包まれたまま今日に至っていると云ってよい。伝本の成立にも関わる重要な問題であり、その実態について検証し直す必要性を感じている。

注

- (1) 小松茂美氏編『二玄社版 日本書道辞典』〔昭和62年 二玄社〕P 161
- (2) 堀部正二氏編著『校異和漢朗詠集』〔昭和56年 大学堂書店〕P 20
- (3) 前掲書〔注2〕に同。P 12
- (4) 陽明文庫編『陽明叢書国書篇』第七輯（解説）〔昭和53年 思文閣出版〕P 7
- (5) 小松茂美氏著『古筆学大成』第一・三・一四・一五巻〔平成2年 講談社〕
- (6) 巻上では本断簡（76く78）のみが知られている（平安書道研究会編『日本名筆全集』第六巻「書芸文化院」P 54、及び小池豊吉氏『ちなみ』〔昭和11年〕）。
- (7) 678は久松切の書写者の筆跡とは異なり（『古筆学大成』第一三巻P 428）、公任の原撰本には無い「後人の加筆」とされた句である（山田孝雄氏校訂『倭漢朗詠集』〔昭和14年 岩波書店〕P 14・15）。
- (8) 記述中、「の次」とは『新編国歌大観』に無く、無番号。当該番号の詩歌句の次（ここでは796の次）に位置することを意味する。本

表記により当該詩歌句の位置を示す。以下、同。

- (9) 「断簡E」では、75と649の行頭の高さは異なり、また、料紙も二首間において「切断の痕が見える。それぞれ一首二行分の和歌の断簡を、後世、合して一幅の掛物として表装したものであることが知られる」(『古筆学大成』第一三巻 P 415)。
- (10) 「680の前部」と「680の後部」とを合わせると「680」の句は完全な姿になる。
- (11) 803の次に近衛本では尾題「倭漢抄下巻」が書されているが、他本には804が存するため、804も考察の対象とした。
- (12) 「652の次」は「後人の加筆」とされた和歌である(山田孝雄氏校訂『倭漢朗詠集』「昭和14年 岩波書店」P 14・15)。
- (13) ③においては近衛本・粘葉本類は、関戸本とは一致するものの雲紙本とは相違していた。
- (14) 法輪寺切に独自事象は見られなかった。
- (15) 『古筆学大成』第二三巻 P 414
- (16) 久曾神昇氏著『仮名古筆の内容的研究』「昭和55年 ひたく書房」P 190
- (17) 拙稿「久松切の位置」(本書「第三章第七節」)・「山城切の位置」(本書「第三章第六節」)・「卷子本の位置」(本書「第三章第二節」)。
山城切・卷子本は雲紙本類の系譜上に位置しており、久松切には雲紙本・粘葉本類の両要素が混在している点について既述した通りである。
- (18) 法輪寺切については、『和漢朗詠集』巻下の和歌三二、漢詩七七、合わせて九九首を調査し得た。本調査において知られる諸伝本の詩歌句を集成すると八一五首となり、『和漢朗詠集』全体からすると、約一二%を占める程度である。従って、粘葉本等と列には比較し得ない。
- (19) 法輪寺切の散逸箇所等の場合は当然のことながら近衛本・粘葉本・伊予切の「三本のみ」ということになる。
- (20) 料紙表面の損傷に因り、判読不可能。
- (21) 古筆学研究所編『過眼墨宝選集一』(昭和62年 旺文社 P 40)に拠る。

- (22) 前掲書(注3) P 209では、近衛本・粘葉本、「獨」とされている。
- (23) 藤田美術館編『藤田美術館名品図録』(昭和47年 日本経済新聞社) P 160)に拠る。
- (24) 柿村重松氏著『和漢朗詠集考證』(昭和48年 藝林舎) 下巻 P 81
- (25) 大曾根章介・堀内秀晃氏校注『新潮日本古典集成』(平成5年 新潮社) P 200。なお、本歌は異同の多い和歌である。近衛本の初句「みかみもる」、粘葉本類「みかきもる」、雲紙本類「みかきもり」とあり、近衛本は結句では粘葉本類と一致していたものの初句には異同があった。
- (26) 三木雅博氏著『和漢朗詠集とその享受』(平成7年 勉誠社) P 183
- (27) ②『兼盛集』I、「いくよをつめる」。⑥『本朝文粹』巻九、「吾」。⑦『元真集』(宮内庁書陵部蔵本)、「としこと」。
- (28) 前掲書(注24) P 155・277・331・333、前掲書(注25) P 217・262・282・283。
- (29) 「二本」とは、近衛本・粘葉本・伊予切。以下、同。
- (30) 諸伝本中、一本のみが異文であるケース。「独自本文」が一首中、複数の伝本間において存する場合もあり得る。
- (31) 近衛本の独自本文(二六か所)のうち、763「なりぬらむ」の他はいずれも誤脱とらしい。
- (32) 太田切、料紙表面の損傷に因り判読困難ではあるが、当該箇所は「ましら」とみてよいと思われる。「ましら」と「ましこ」は同義であるため、解釈上はさして問題にはならないが、「ら」と「こ」の文字の形は判別し難い。
- (33) 前掲書(注3) P 134では粘葉本、「ましら」とされている。
- (34) 前掲書(注3) P 157では近衛本、「澗」とされている。
- (35) 雲紙切の当該文字について、『古筆学大成』第二七巻(平成3年 講談社) P 276によると「澗」と判読されているが、旁には「加筆」(『古筆学大成』第一三巻 P 402)と思しき跡が認められ、当初は「洞」であったと推される。
- (36) 前掲書(注3) P 190では近衛本、「也」とされている。

- (37) 以下の三本の表記は次の通り。雲紙本・関戸本、「まち出鶴鮑」。卷子本、「待出鶴かな」。
- (38) ③④⑤⑧⑩のうち、⑧は出典未詳（三木雅博氏は⑧について、粘葉本類の本文「白」の方が「原詩の本文であったことは確かであろう」とされた（前掲書（注26）P178）。その他については粘葉本類と出典とは相違していた（③『詞花集』巻九、『麗花集』巻下、「なりぬへきかな」。④『本朝文粹』巻十二、「必」。⑤『白氏文集』巻十、「青」。⑩『本朝文粹』巻九、「帳」）。
- (39) 前掲「B・C」中にもそれぞれ雲紙本類との同文箇所は存するが僅少であった。
- (40) いわゆる、伊予切「第一種」（1〜235）を指す。